広報きたもと
2月
2018 №960

特集面

きっと、もっと、きたもとが好きになる 旬な話題をお届け!

|特|集|

北本の歴史を探る ⑤

高尾のカタクリものがたり

北本の歴史を探る ⑥

縄文文化へのいざない

北本の歴史を探る⑤

高尾のカタクリものがたり

市内の高尾6丁目には、市の天然記念物「高尾カタクリ自生地」があります。この自生地は平成8年に天然記念物に指定され、その後、20年余りにわたって保護活動が続けられてきました。

まもなく、春になるとカタクリが可憐な花を咲かせます。ここでは高尾にあるカタクリの秘密と魅力について紹介します。

カタクリは春の妖精だ

カタクリはユリ科の多年草です。3月半ばになると2枚の葉を広げ、ちょうどソメイヨシノが盛りになる4月上旬、花は満開を迎えます。

この時期は、まだ雑木林が芽吹く前で、枯葉の上に、点々とかがり火を焚くように花をつけます。陽が当たると、ピンク色の花びらがクルリと反り返り、春風に揺れる様は、まるで妖精が踊っているかのようです。そして、5月の上旬には葉を落とし、土中の球根で一年の大半を寝て過ごすのです。

このため、カタクリは春の妖精、または春のはかない命を意味する「スプリング・エフェメラル」と呼ばれています。

高尾が最後の自生地だ

埼玉県内の丘陵地では、カタクリの自生地が所々に残され、ところによっては、大群落を形成しています。

高尾カタクリ自生地

ところが、県内の平野部では、カタクリの自生地はとても限られ、とくに荒川より東側の大宮台地では、北本市が最後の自生地になっているのです。

そこで、この貴重な自生地を未来に伝えるため、地主さんの協力を得て、平成8年に市の天然記念物となったのです。

カタクリの不思議

カタクリはとても不思議な植物で、その「不思議さ」が、この花をいっそう魅力的なものにしています。

不思議の1つ目は、北側の斜面にだけ自生することです。微妙な環境のバランスの中で、カタクリは生きているのです。

不思議の2つ目は、地上に姿を現している時期が、1年のうちで2か月しかないことです。この時期は、陽射しが暖かくなり、雑木林の葉が茂るまでの間です。これはカタクリが落葉樹のサイクルに適応した知恵だといわれています。

不思議の3つ目は、カタクリは氷河期の生き残りで、当時から現在まで、ほとんど移動していないことです。カタクリの種子はアリが運ぶため、移動できる距離はほんのわずかなのです。

カタクリの森を守る

カタクリ自生地の整備を始めたのは、平成7年のことです。この時のカタクリは、花をつけたものがたったの12株でした。自生地がヤブとなり、日照条件が悪かったためです。そこで、竹や照葉樹を刈り払い、落ち葉を掻いて、環境を整えることから始めました。

すると、翌年には70株、さらにその翌年には150株と開花数が増加し、昨年の平成29年4月には、3388株が花をつけるようになりました。

花が増加した理由は、毎年の環境整備だけではありません。花の時期には受粉をし、結実した種を採集し、計画的に自生地にまいて育ててきたためです。「カタクリ保存会」の取組は、今年で23年目を迎えました。

人と森の共生を物語る

移動できないカタクリは、氷河期の頃からこの自生地にとどまり続けていたと考えられます。しかし、縄文時代の温暖な時期には、通常、落葉樹は照葉樹となって暗い森に変わります。これはカタクリが生活できない森です。

では、なぜここにカタクリが残ったのでしょうか。それは縄文時代の昔から、人々がこの林を管理し、1万年以上にわたってカタクリに適した環境が保たれてきたからです。カタクリこそは、人と森との共生を物語る生き証人といえるのです。

花の受粉作業（春期）

自生地の山掻き作業（冬期）

カタクリミニ図鑑

【花】
ピンク色の花びらが美しく、自生地の観察では8年から9年で花が咲きました。花が咲くまでに約8年の歳月を要します。

【葉】
花が咲くまでは1枚で、開花時に2枚となります。地元ではカエルをイメージして「ゲーロッパ」といわれています。

【種子】
1株で10～20粒が実ります。アリを誘因するエライオソームという物質を含んでいて、アリが運ぶことで移動します。

北本の歴史を探る⑥

縄文文化へのいざない

最近の遺伝子学の研究によると、縄文人はアジアのどの地域の人とも大きく違うことがわかってきました。縄文人は古くから日本列島に渡り、独自の文化を進化させてきた特異な集団だというのです。

豊かな森の中で自然と共生し、平和な社会を築いていた縄文人の文化は「平和」や「環境」といった問題を考えるとき、わたしたちがめざすべき方向を示しているのかもしれません。

今回は市内に残る縄文時代の遺跡にスポットをあて、彼らの生活と文化を考えていきます。

豊かな自然の中で

旧石器から縄文の時代へ

北本市域に人々が生活を始めたのは、今から2万年以上前の旧石器時代でした。当時は氷河期というとても寒冷な気候であったといわれています。

旧石器人はこうした厳しい自然の中で、オオツノシカ等の大型動物を追い、キャンプ生活を続ける流浪の民であったようです。

市内には、彼らのキャンプ跡が谷筋の高台に点在しています。

市内で最も古い下宿遺跡（石戸宿5丁目）では頁岩製のナイフ形石器が、八重塚遺跡（荒井6丁目）では黒曜石製の尖頭器などが出土しています。これは獲物を狩る槍先に利用されたものです（図1）。

図1　旧石器時代の遺物

尖頭器（八重塚遺跡）　ナイフ形石器（下宿遺跡）

縄文時代が始まった

今からおよそ1万6千年前、気候が温暖化し、大地上には豊かな動植物が育まれるようになります。人々は世界に先駆けて土器を発明し、縄文時代が幕を開けます。

縄文人の二大発明は、この「土器」と「弓矢」です。土器はモノを煮ることを可能とし、弓矢は獲物の命中率を高めました。

また、縄文人は竪穴住居という住まいをつくり、定住するようになります。そして周辺の植生をクリやウルシ、クルミなど、生活に有用な林へとつくり変えていきます。

さらに、ダイズやアズキのほか、エゴマやシソ等を栽培するなど、高度な植物利用の実態が明らかにされつつあります。

縄文社会はここ数年の研究により、「狩猟・栽培」の社会と再認識されるようになってきたのです。

縄文の遺跡をさぐる

三五郎山遺跡（本町1丁目）

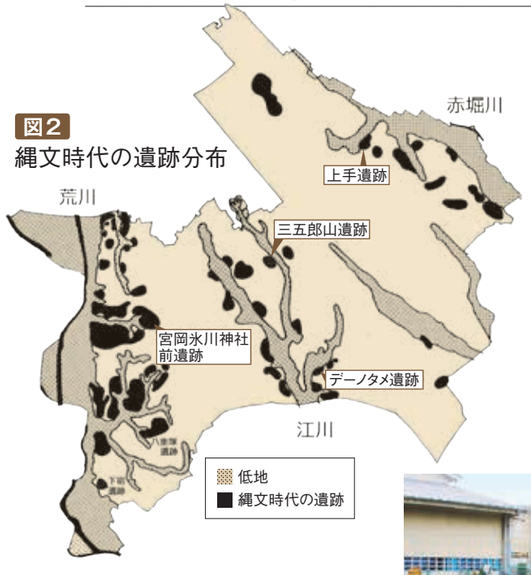
遺跡の中心部は市役所

市役所の敷地内には、縄文時代中期（約4500年前）の集落が広がっていました。市役所のある場所は高台で、東側には江川の支流が流れる低地に面しています。こうした水を得やすい場所に縄文人たちはムラをつくりました。

これまで駐車場や庁舎をつくるために、事前の発掘調査が行われています。この成果として、住居跡が合計で13軒確認されました。住居跡の分布状況から、直径140mほどの環状集落であったと考えられます。

住居跡のほかには、土器を廃棄した土坑やシカを捕まえるための落し穴などが検出されています。

図2　縄文時代の遺跡分布



落とし穴

市役所内の調査風景

上手遺跡（古市場1丁目）

北向きの集落

遺跡は北側に低地を望む台地上に位置しています。縄文時代の集落はこの台地の縁に沿うように中期（約4200年前）から後期（約4000年前）にかけて営まれていました。過去に行われた大規模な発掘調査で見つかった住居跡は中期が35軒、後期が6軒です。いずれも北向きの斜面地に位置していました。

住居跡群

縄文時代の住居跡は時代によって形が変化します。

上手遺跡の住居跡には、入口部分が外へ伸びるタイプのものがあります。これらは持ち手のある鏡を伏せたような形から、「柄鏡形住居」と呼ばれています。また、長径15mにも及ぶ後期の大型住居跡なども確認されました。

上手遺跡では、縄文時代の中期から後期にいたる住居形態の変遷を明らかにすることができました。

柄鏡形住居跡

コラム Column

遺跡はどこに？

ウサギのような形をした北本市の大半は、大宮台地という高台に位置しています。西側の荒川沿岸は崖状になっていて、標高は30mを超えますが、東側の赤堀川沿岸は標高が13mほどと低く、北本市は「西高東低」の地形なのです。一見、平坦な地形ですが、市の西側は谷津地形が発達し、市の中央部には江川という小河川が流れ、その支流は市役所のすぐ東側を流れていました。

古代人の生活に最も大切なものは「水」です。ですから市内の遺跡は、西の荒川流域、中央の江川流域、東の赤堀川流域というように、水の便の良い、谷を見下ろす高台に連なっているのです。

図2は市内の縄文時代の遺跡の分布を示したものですが、この傾向がよくわかります。

宮岡氷川神社前遺跡（荒井1丁目）

泉に支えられた集落

この遺跡は、縄文時代後期（約3300年前）から晩期（約2500年前）まで続いていました。その範囲は近くの氷川神社から須賀神社の境内を取り巻くように広がっていると考えられます。

現在、厳島神社が祭られる場所は、湧水が池となっています。この湧水は、縄文時代から噴出していたと思われ、集落に住む人たちにとっては、生活に欠かせない水源であったと思われます。

このように、集落は安定した高台と豊富な水源に恵まれた環境の中にありました。

狩りと漁労

この遺跡では他の縄文時代の遺跡に比べると、石鏃が多く出土します。石鏃とは矢じりのことで、矢の先端に装着して使用します。石材や形態、大きさも様々なものが出土します。石鏃の中には刃の部分に細かいギザギザをつくって、獲物に命中したとき、簡単に抜けないように細工されたものもあります。

また、漁労に利用した遺物も確認されています。小石の両端を細かく欠いて紐を結べるように加工した石錘と呼ばれる道具で、投網の重りとしました。なかには小石の紐をかける部分を丹念に磨いている遺物も確認されています。さらに、軽石を加工して釣り道具の浮きとした遺物もあります。

これらのことから、この集落では狩猟や漁労に力を入れていたことがわかりました。当時の人々は植物だけでなく、動物性の食料を多く摂取していたのかもしれません。

祈りの品が続々と

この遺跡の特徴は、祈りや呪いにかかわる遺物が豊富に出土することです。

遺物の中で、まず目を引くのが耳飾です。直径1㎝のものから大きいものでは8㎝を超えています。丁寧に細工され、デザイン性を強く意識してつくられました。これらは、耳たぶに穴をあけて装着されたもので、現代でいえばピアスとなります。

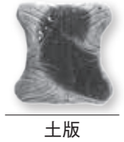
また、板状の土器に模様を複雑に描く土版は、上部に小さい穴が4つ開けられています。紐で吊り、護符にしたと考えられます。

石製品ではペンダントの垂飾が見つかっています。そのうち1点は途中がくびれている勾玉です。さらにこれらをつないでビーズにした小玉も見つかっています。分析からヒスイで作られたものを含んでいました。

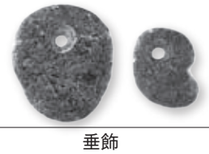
このほかにも、不思議な遺物も出土しています。例えば両刃の剣を表現した石剣や先端を宝珠のようにとがらせた石冠があります。いずれも実用品ではなく、儀式の際に装飾品として、呪術者の身を飾ったか、祭器として使われていたと推定されています。

石錘

耳飾


土版

石冠


垂飾

大型住居跡の調査

石剣出土状況

コラム Column

土偶のはなし

土偶は縄文時代につくられた土製の人形です。その特徴は、ほとんどが女性であること、呪術者を表現していること、そして多くは人為的に壊されていることです。そのため、呪いや祭祀は基本的には女性が担っていたとも考えられます。また、わざと壊す行為は、身体の悪い部分を土偶に代わってもらう祈りからだともいいます。

宮岡氷川神社前遺跡から出土した土偶は、両足がなく、土器片を枕にして寝ている状態で検出されました。儀式後に丁寧に埋納されたものなのでしょう。

開催します！

シンポジウム デーノタメ遺跡が拓く縄文の世界Ⅱ

日時 3月3日（土） 13:00～17:30　場所 文化センターホール

1 基調講演
「縄文時代中期から後・晩期の環境と人々の生活 －年代学の視点から－」
工藤雄一郎（国立歴史民俗博物館）

2 報告
報告1「デーノタメ遺跡の調査成果2017」
坂田敏行（北本市教育委員会）
報告2「デーノタメ遺跡の縄文人の植物食」
佐々木由香（株式会社パレオ・ラボ）
報告3「化学分析でせまる縄文時代の食生活：デーノタメ遺跡出土土器に付着した炭化物の分析から」
米田　穣（東京大学）
阿部芳郎・岸田快生（明治大学）

3 パネルディスカッション（各発表者）

申込み不要

入場無料

同時開催「デーノタメ遺跡出土品展」3月1日（木）～4日（日）文化センターホワイエ

問 文化財保護課　☎594-5566

※都合により内容を変更することがあります。